横須賀市博研報(人文)　Rept. Yokosuka City Mus., No. (70):63-82. Mar. 30, 2026

横須賀市長坂の変遷
―髙橋豊家氏よりの平成14、15年ごろの聞き取りをもとに―

原田保子*　瀬川渉**

Changes in Nagasaka, Yokosuka City during the Showa Period

HARADA Yasuko, SEGAWA Wataru

This paper documents the lifetime stories and notes of Takahashi Toyoie, a farmer born in Nagasaka, Yokosuka, in 1925, compiled by his eldest daughter, Harada Yasuko. Similar reports were also published in 2024 and 2025, but this article focuses on how Nagasaka, Yokosuka changed in relation to the military during the early Showa period, covering the general overview of Nagasaka, place names and roads, house names, and water supply.

はじめに

大正14年横須賀市長坂堀越地区に生まれ令和3年に他界した髙橋豊家は、喜寿を迎えた頃から、自分の見聞きし、体験してきた長坂の変遷を子や孫、地域の若い人たちの求めに応じて、様々な場面で語ってきた。その際には事前準備としてテーマに沿って記憶を整理し、日記を読み返して、メモを作成した。時には、それらの清書や発表資料の作成を長女の原田保子が引き受けた。ここでは、「長坂の変遷に関わっての、豊家の体験」・「古来伝えられてきた長坂の概要」・「長坂の屋号」・「長坂堀越地区に市営水道が敷設されるまで」について、生前の豊家から聞いたことに加え、豊家のメモ・資料・遺された日記をもとに記すことにする。(なお、本文中の豊家の話にある現在は、聞き取り時の平成14、15年ごろを指している。)

1．長坂の変遷に関わっての、豊家の体験

(1) 溜め堰の建設

昭和の初期、長坂には堀越堰・沢山堰・虫山堰の3つの溜め堰が造られた。最初にできたのは堀越堰で、昭和6～7年の冬、私が4月に小学校入学を控えた年のことであった。工事が始まると近所の遊び友だちと二人で毎日のように様子を見に行った。工事の進展そのものにも興

＊髙橋豊家 長女　**横須賀市自然・人文博物館 Yokosuka City Museum, Yokosuka, 238-0016 Japan
原稿受付　2025年12月25日　横須賀市　博物館業績　第805号
Key Word : Nagasaka Yokosuka City, Relationship between region and military in the early Showa Period, Water supply, House names, Communal well
キーワード：横須賀市長坂　昭和初期の地域と軍との関係　水道敷設　屋号　共同井戸

味があったがそれ以上に１つ年上の友だちが工事現場の看板の数字やカナを読んでくれるのが楽しかった。自分も早く１年生になって文字が読めるようになりたいと思ったことが記憶に残っている。沢山堰のできたのはその約２年後の昭和９年で、大型堰として評判であった。付近の谷戸・清水耕地のみでなく、荻野耕地・前耕地・鹿島耕地にも利用された。沢山堰の建設時に堰堤南東端に建立された水神碑は今も残り、堰建設に関わる詳細が刻印されている。

これらの溜め堰の建設により、雨水や川の水が頼りだった長坂の米作りの苦労が軽減された。

（２）斉田浜の埋め立て

昭和７年頃、斉田浜の海岸が旧海軍用地となる前のことだが、鹿島地区にアルコール原料のためのサツマイモ作りをしたり淡水魚の飼育をしたりする業者が現れ、斉田浜の一部を買い上げた。その業者は現在くすのき台住宅地となっている山林や農耕地も買収し、そこを切り崩し、線路を敷設して機関車付きのトロッコで土を斉田浜まで運び、海岸を埋め立てて畑や養魚池を作った。当時、トロッコは子どもたちの興味関心の的で、小学校低学年だった私たちも見に行った。自動車も少なく電車もなかなか見ることのできなかった長坂の子どもたちは「すばらしい！」の連発だった。

養魚池の水は、谷戸地区の川を堰き止めてそこから鉄筋コンクリート製のヒューム管を用いて、斉田浜まで延々と送水した。この時、谷戸地区に造られたのが虫山堰である。

（３）長坂に旧海軍施設建設

昭和15年、長坂鹿島地区・堀越地区の一部が旧海軍用地として買収された。我が家のある堀越地区の場合、それは昭和15年の年明け早々のことだった。その時14歳だった私は父親から次のようなことを聞いたと記憶している。「理由は知らされず、突然、明朝実印を持って現地に来るようにとの連絡があり行ったら、ここが海軍用地となるので書類に押印するようにとのことで、その場で売渡し契約が交わされた。売却代金は、屋敷の立退きを伴う場合には後日現金で支払われたが、我が家は農地のみの買収であったので、現金ではなく、銀行の３年定期預金の証書が手渡された。したがって、７反歩が買収されたものの代替地の購入はできなかった。」と。このとき堀越地区では地区の約半数にあたる７軒の家と１箇寺が立退きとなって、そのあとに射撃場が建設された。

（４）鹿島地区の立退き

同じく昭和15年に斉田浜・林・御幸が浜一帯も旧海軍用地として買収され、長坂では、鹿島地区の約 20 軒の家が立ち退きとなった。当時の鹿島地区は斉田浜・岩崎山を中心とした地域で、斉田浜に面した一帯の水田は鹿島耕地（かじまごうち）と呼ばれており、住民の多くは主として農業、副業に漁業を営んでいた。平坦な鹿島地区では、立ち退きに際して、解体せずに曳き家工法で移転

する家もあって珍しかった。とりわけ、交番の移転は通学路からよく見えたので、毎日どこまで動いたかが当時の長坂の小学生の関心の的だった。

住民が立ち退いた後、海沿いの県道は封鎖され、代わりに軍用地と民有地の境に新しく県道が造られた。この新道は岩川橋の袂から現在の市民病院バス停付近まで直線で1,000メートルだったので、戦時中は青年学校生の体力検定に利用された。なお、新道の建設にあたっては、川の流れも変更になった。昔の松越川は芦名・長坂の境を流れ、岩川橋の先で長坂・佐島の境を南下し小田和湾に流入していた。ところが、新道の建設に伴い、松越川は佐島との境の海に流れ込むのではなく、新道(現在の国道１３４号線)沿いを現在の消防署の手前まで東向きに流れて沼坪川と合流するようになった。沼坪川とは、長坂の谷戸の奥が源流で、荻野を流れ、下流では再び長坂を流れて小田和湾に注ぐ川で、荻野では荻野川、長坂では沼坪川と呼ばれていた。この川に松越川が合流するようになると、合流した先は沼坪川ではなく松越川と名前が変わってしまった。

斉田浜には横須賀第二海兵団・大楠機関学校が設立されたのだが工事は突貫工事で作業員は殆どが朝鮮の人たちであった。工事が始まると飯場ができて、朝鮮の白い民族衣装の女性たちが炊事をする姿をよく見かけた。海兵団ができると、役場からの割り当てで長坂の何軒かの家に海軍さんが下宿、その他の家にも休日には海軍さんが休息に訪れるようになった。

終戦後海兵団は米軍に接収され、返還されたのは昭和33年のことだ。返還された土地の大部分は陸上自衛隊武山駐屯地として引き継がれ、残りは工業用地と公共用地となることが決まった。そのため行政センター・市民病院・消防署等ができ、長坂はやがて横須賀西地域の行政の中心地となっていった。

米軍に接収された旧海兵団で火災が発生、飛び火で谷戸の妙泉寺が全焼し、火災後お寺は荻野の正蓮寺に合併、元の場所は墓地が残るのみとなったのも、戦後の長坂の歴史に残る出来事である。高度成長期に入り、時代の流れと共に長坂の人々の暮らしも変化していった。農村地帯だった長坂が、現在のように変遷していった契機は、旧海軍施設の建設・米軍による接収と返還に際しての土地使用目的の限定によることが大きいが、戦後の農地法の施行・昭和30年代後半以降の山林の買収・昭和47年に土地計画法により市街化区域と市街化調整区域の区分が決まったことも大きかったと思う。

昭和15年頃の長坂・荻野は120～130戸くらいであったが、現在は長坂町内会約900世帯、市営住宅240世帯、くすのき台250世帯、荻野県営住宅、警察公舎も合わせると合計で1500世帯以上になっている。一方、現在の農業組合員は97名だがそのうちの専業農家はごくわずかになってしまった。

２．古来語り継がれてきた長坂の概況

横須賀市長坂・荻野地区の概況は古来、「長坂七里・七塚・七本松・七街道・八庚申」という言葉で語り継がれてきた。しかしながら、時の流れと共に地域の様子も変化し、今ではこの言葉自体を知る人も少なくなってしまった。

七里とは長坂に昔からあった七つの集落を意味し、里内には同じ苗字の家が多い。七つの里の名は現在も長坂の町内会や、農業生産組合などでは「〇〇株」と呼んで、地区名として残っている。なお、荻野は江戸時代の寛文年間に長坂村から分村し、荻野村となったが、戸数が少なかったこともあり、長坂村の里の一つであったころと変わらない暮らしが続き、現在に至っている。

明治時代に一村一社の令に従い村社「祖母神社」（註１）に合祀されるまでは、各里にはそれぞれの氏神様であるお社が祀られていた。お社の境内は、里の中心的な家の所有地であることが多かったが、境内が里の共有地となっている場合もあった。合祀後も祠が残り里人に守られてきたお社もあるが、開発や人々の暮らしの変化により消滅した例も多い。（下表参照）

「長坂七里・七塚・七本松・七街道・八庚申」

七里	① 鹿島	② 荻野	③ 谷戸	④ 堀越	⑤ 石谷戸	⑥ 里	⑦ 寺地
里の社（通称）※現況及び経過	秋葉社（あきしゃさま）※なし 跡地は前氏子共有地。開発に伴い売却、代金を祖母神社に奉納。	祇園社（ぎおんさま）※荻野正蓮寺境内に現存。	白山社（しらやまさま）※なし 合祀に際し、跡地は地主の所有地に。	浅間社（せんげんさま）※射撃場東側に現存。昭和末頃まで旧来の神事が行われていた。	若宮社（わかみやさま）※なし 合祀に際し跡地は祖母神社に奉納。	山王社（さんのんさま）※なし 跡地は前氏子共有地。	白山社（はくさんさま）※白山社土地に現存。
七塚	首塚	シャムジ塚 貝塚 長塚	石塚	庚申塚	鳴塚	水神塚	
七本松	一本松 三本松	貝吹松		浅間松		水神松 ケアイの松	
七街道	川海道・峯海道という小字があり、與瀬三崎街道(県道)・吉野三崎街道・三崎往還が記録に残る。「イヤカイドウ」という名前も伝わる。が、七街道は不明。						
八庚申	各里に一ヶ所ずつ、堀越には、浄土宗と日蓮宗の二ヶ所の庚申塔がある。						

七塚については、上の表のように８つの塚の名が伝わり、文献や口承で場所も伝わっている（地図①参照）が、いずれも形跡は残っていない。特に、首塚は一帯の大規模宅地造成工事により、あったと伝わる山自体が今はない。上記以外の塚の名が伝わっていたと書物で読んだこともあるので、どれが七塚であるのかは定かではない。

七本松は、名称としては６項目だが、ケアイの松が祖母神社の参道入口と境内の二ヶ所に分かれていたので２本と数えて計７本になる。現存しているものはないが、昔あった場所は見たり聞いたりして知っている（地図①参照）。三本松は、旧海軍施設建設に伴い立退きとなった鹿島地域内(現在の国道 134 号線付近)にあった。浅間松は堀越の浅間社境内にあったが、第二次世界大戦末期に飛行機燃料用の松根油（しょうこんゆ）の原料とするので供出するようにとの通達があり里人が切り倒した。けれども、運び出されることはなく終戦を迎え、境内で朽ちていったのを見ている。

七街道は、あったとは伝わるが昭和の初め頃には既に、「○○街道」と呼ばれている道はなかった。

長坂で「カイドウ」と聞いてまず思い浮かぶのは小字名の「川海道」と「峯海道」だ。各々山越えで隣村に通じる古道が残り、川海道には「馬繕い場」という地名も残っている。そのような状況からこれらの小字名は、昔そこを通っていた街道名に因んで名づけられたのではないかと想像できる。

その他に、「イヤカイドウ」という名前を聞いた覚えがある。「イヤガ」と関係がある道かとも思うが、どの道を指すのかは定かではない。イヤガとは現在の国道 134 号線と長坂・芦名の境界を流れる岩川（＝松越川）とが交差する辺りの芦名側の地名であり、長坂から芦名・秋谷方面に向かうためには必ず通る場所だ。昭和の時代まではこの辺りに止め堰が造られていて、「岩川の堰」とも「イヤガの堰」とも呼ばれていた。

昭和 15 年ごろの長坂のメインストリートは斉田浜を通る県道（註２）で、ここを乗合バスが走っていた。県道の北側にももう１本長坂を東西に貫く主要道路があった。現在では、道幅が狭く国道のバイパス的存在となって残っているが、矢倉の前から国道の北側を並走するように鹿島・荻野を通って県立三崎水産高校（註３）の入口で国道と合流している道がそれである。昔はこの道が長坂を南北に貫く何本かの道の起点となっていた。郵便ポストもこの道沿いの小間物屋の前に設置されていた。この道沿いには現在、商店はないが、昔の屋号が「○○や」「○○みせ」である家が多くある。江戸末期、浦賀の奉行所に向かう武士の列がこの道を通り、近在の住民は道端で土下座をして出迎えたという話を子どものころに聞いた記憶もある。道の名前はわからないが、この道もおそらく昔の「街道」であったのであろう。

八庚申とは８ヶ所の庚申塔のことで、各里にあった庚申講の講中が里内の道路脇などに建立したものである。現在、長坂では庚申講は途絶えているが、各里の庚申塔は現存している。（地図①参照） 開発や道路拡張のために移転したり、１基しか残っていなかったりする所もあるが、

谷戸・堀越・石谷戸3ヶ所には一番新しい庚申の年である昭和55年（1980）に建立されたものも残っている。鹿島の庚申塔は旧海軍用地となったために何軒かの講中の所有地等に分かれて移転、鹿島以外の里に移転した例もある。

「長坂七里（ななさと）・七塚（ななつか）・七本松（ななほんまつ）・七街道（ななかいどう）・八庚申（やこうしん）」という言葉で古来伝えられてきた横須賀市長坂・荻野地区の概況に関して、髙橋豊家より聞き取った内容は以上である。

なお、文中の「現在」は、聞き取り時の平成14・15年ごろを指す。

上記の表と地図は、聞き取り内容に加えて、聞き取りに先立ち豊家の記していたメモも参照し、一部加筆修正して作成したものである。

以下は不明点の残る項目について、著者が聞き取り内容や資料をもとに補足説明・考察した内容である。

（1）七塚について

長坂・荻野には、昔あったという七つの塚の名前と場所が口承で伝わっている。その他にも、文献に残る塚の名もある。『新編相模國風土記稿』（天保12年成立）には、荻野に「シャムジヅカ」があったと記されている。それは、正蓮寺後ろの丘の上にある貝吹松の樹辺にある古塚(註3)であるとのことである。長坂の人たちの伝える「貝塚」も正蓮寺裏山にあったとのこと。名前は異なるが、あったと伝わる場所が同じなので、両者が同じものである可能性は高い。七塚は口承のとおりで確定なのだろうか。

ただし、①『古老が語るふるさとの歴史　西部編』（横須賀市編集、昭和57年）p15の囲みには「ひでん塚」（荻野）とあり、②『三浦半島の伝説』（田辺悟編著、昭和46年）には「七ツカとは、……シギヅカ、オシャヅカ、コウシンヅカ、イシヅカ、テンジンヅカ、スイジンヅカ、クビヅカで……」とある。①②には、塚の場所は記されていない。また、下線を引いた3つの塚の名前も地元では知られていない。七塚を確定するには更に調査が必要と思われる。

（2）七街道について

大正14年生まれの豊家の記憶では、長坂には街道と呼ばれていた道はなかったそうだが、実は、大正時代に作成された『西浦村誌』（註5）には「街道」の記録が残っている。『西浦村誌』の「十六、交通」の項に「県道ハ西葉山村ヨリ来り武山村に通ズ所謂與瀬三崎街道是ナリ」と記されている。この記載に従えば、斉田浜の海辺を通っている県道がすなわち與瀬三崎街道であるということになる。ところが、同誌添付の「西浦村略圖」には「與瀬三崎街道」の記載はなく、逗子方面から三崎方面に通じる街道には「吉野三崎街道」と記されている。この街道は長坂の海辺を通ってはいない。略図とはいえ、「県道」とは位置が違いすぎる。「吉野三崎街道」

と「與瀬三崎街道」は名前も異なるように、長坂の辺りではある時期から三崎街道が異なるところを通るようになったということなのだろうか。

江戸時代の『新編相模國風土記稿』巻之百十　村里部　三浦郡巻之四　○長坂村　の項には「三崎道海邊を通ず」とあり、○荻野村　の項には「三崎往還村南に在り…路傍に古松あり、…一本松と唱ふ、…」とある。一本松と称された古松のあった道路は海辺を通っていた県道ではなく、豊家の語っていた「現在、商店はないが、昔の屋号が「○○や」「○○みせ」である家が多くある道」であることは確かだ。古松のあったというところは長坂の鹿島と荻野との境界に近いところで、そこには今も一本松という屋号の家が残っている。「元禄国絵図」（元禄９年～15年）に描かれている秋谷方面から三崎方面に通じる道路も位置的にみてここを通っていると言えよう。

明治初期に作成されたと伝わる『長坂村誌』には「道路」の項に「鎌倉ヨリ三嵜へ通スル往還　西南西ノ方芦名村ヨリ来リ村ノ西南部ヲ貫キテ南方大田和村ニ通ズ……」とあり、「掲示場」の項には「西南西ノ方三嵜往還ノ側字下（シモ）ノ山（ヤマ）ニアリ」とある。『長坂村誌』では、「三崎往還」が、海辺の道であるとの記述は見られない。『風土記稿』荻野村の項に記載されている「三崎往還」と『長坂村誌』の「三崎往還」は同じ道と考えられる。そうだとしたら、当時の長坂村には主要道の「三崎往還」のほかに海辺を通る「三崎道」もあったということになる。

明治時代以降の測量に基づく２種類の地図を比較してみると、長坂の南側を東西に貫く道路の変遷がうかがえる。明治15年測圖（地図②）では、長坂の海辺には広い道はなく、地図上で「自鎌倉至三崎」と記されている道は一本松のあったという道である。（本稿では以降、便宜上この道を「旧道」と仮称する。）明治28年測図明治36年修正測図（地図③）では海辺の道と「旧道」がともに広い道として記されている。

長坂の南側を東西に貫き秋谷芦名方面・三崎方面に通じる主要道路の歴史は、三崎往還、三崎街道（吉野三崎街道・與瀬三崎街道）、県道、国道と続いてきたのではあるが、時の流れと共に名称のみならず、道路自体の移動があったということが口承と文献から推測できる。吉野三崎街道から與瀬三崎街道へと長坂の主要道が替わった時期や理由を知る確かな資料を探してみたい。

註１：元和２年日向の国の姥嶽明神を勧請、「祖母山明神」と称されていたが、明治６年に村社となり、
「祖母神社」と名称変更された。元和２年の棟札には地頭間宮寛助義則と記されている。
（参考：『祖母神社のゆらい』2008.2 長坂氏子会、『神奈川県三浦郡志復刻版』1996 千秋社）

註２：大正９年、鎌倉三崎線として県道に認定。旧海軍施設建設に伴い、この道路は封鎖され、

海軍用地と民有地との境界に新たに県道が建設された。新しく建設された道路を当時の長坂の人たちは「新道」と呼んだ。この道路が現在の国道134号線である。

註3：2008年(平成20年)「県立海洋科学高等学校」と改称

註4：「新編相模國風土記稿」○荻野村　の項に

……○貝吹松　正蓮寺後丘上に在り……樹邊古塚あり高四尺、しやむじ塚と云　人触れば祟りあり　とある。

註5：「大正5年以降、近々に作成」とされているが、交通の項に「県道」とあるので、「與瀬三崎街道」が鎌倉三崎線として県道に認定された大正9年以降に作成されたものということになろう。

3．昭和15年ごろの長坂の屋号

昔から長坂には100軒、荻野には20軒の家があったと伝えられ、その数は明治大正期を経て昭和の初めまで大きな変動はなかった（註1）。長坂七里といわれてきたように、長坂では7つの集落ごとに一族が氏神を祀って暮らす里の暮らしが続いてきたので、各里内には同じ苗字の家が多かった。そのため、各家は屋号で呼ばれていた。先祖の名前や職業が屋号となっている場合が多いが、その他にも様々な由来の屋号があった。社会増による人口増加が続き、戸数が昔の10倍以上にもなっている現在の長坂・荻野地区の暮らしの中では、昔ながらの屋号で呼び合うことは少なくなっている。むしろ、その必要性がなくなっていると言った方が適切かも知れない。屋号が人々の記憶から消えてしまう前に、各里の屋号について記録しておきたい。

なお、長坂では、昭和15年以降鹿島・堀越地区に旧海軍施設の建設が始まり、両地区はそれぞれ地区内の約半数の家が立退きとなり、里の外に移転する家もあった。昔ながらの里の成り立ちを伝えるために、ここでは、立退き前の各里の屋号を記すことにする。

註1：明治初期に記された「長坂村誌」「荻野村誌」によれば、長坂村の戸数は平民112戸、社4戸、寺4戸とあり、荻野村は平民19戸、寺1戸とある。

旧海軍施設建設に伴う立退き以前の長坂各里の屋号

里名			鹿島	荻野	谷戸	堀越	石谷戸	里	寺地	合計
戸数			33	19	9	15	19	19	12	126
屋号のある家の数			28	17	9	15	19	19	12	119
屋号の分類	①寺・神社	1		正蓮寺	妙泉寺	善性寺		妙印寺	無量寺	
		2						祖母神社		6
	②先祖の名前	1	イチエム	カエム	ゴスケ	サゼム	クエム	クメハチ	シロゼム	
		2	キンベエ	カクゼム	ショウゴロウ	ジョウハチ		ゴンエム	ヤスベエ	
		3	サゴベエ	ヘイベエ	シロゼム	ダエム		ゴンシチ		
		4	セイベエ	ヨジエム	ジロゼム	タジエム		スケム		
		5	トクエム		ヨヘエ	ハチロエム		ヘイロク		
		6				ハチロゼム		ロクエム		
		7				ロクゼム				30
	③分家を表す呼び名	1	インキョヤ	インキョヤ		シンヤ	カンゾミセ			
		2	コウジヤミセ	シンヤ		シンヤシキ	ニイエ			
		3	ニイエ			ミセ	ニイヤ			
		4					ハンジロニイヤ			12
	④職業・企業名	1	一本商店	アメヤ			アブラヤ	カシヤ	ツキバ※	
		2	岩崎別荘	オケヤ			カジヤ	カジヤ	ヤマダヤ	
		3	カメヤキ	コウジヤ			ブチヤ※	コウヤ		
		4	共栄社							
		5	ケベットウ※							
		6	左官屋							
		7	シオハマ							
		8	ヤネヤ							19
	⑤屋敷の位置や地形、屋敷を象徴する風物など	1	オモテ	ウワテ	イリ	クボ	カド	オオシタ	ニシ	
		2	クラノウエ	ハラ	オク	コシミズ	カンゾノウエ	シタガ	ヤグラノマエ	
		3	デエ※	ヤマサキ	アラト※	セド	コミネノオモテ	シモ	サワタリ	
		4	デグチ	マツヤマ		ミヤジ	タガシラ	ドオミチ	コウチ	
		5	ワキ	クルマ※			タナカ	マアット※	テラジ	
		6	ニイミチ	イシダ※			ドテ	センゲンヤマ	テラヤマ	
		7	ハナレヤマ	カマダ※			ハシド※	落ち葉の井戸の家	ハクサンモリ	
		8	フタツヤマ				マツヤマ			
		9	ナガバタケ				ヨシバタケ			
		10	一本松							
		11	三本松							48
	⑥その他	1	イズモ				オオカンゾ	ゴダイミョウ		
		2					コカンゾ			4

※印のついた屋号の説明：ツキバ(精米所)、ブチヤ(綿打ちを職業とする家)、ケベットウ(毛別当＝外国人に雇われている馬方《家人が江戸で外国人の馬方をしていた家》)、デエ(台地)、クルマ(水車)、イシダ(固い田)、カマダ(深い田)、アラト（新しいところ)、ハシド(橋の架かっているところ)、マアット(廻るところ)

上の表から見ると、昭和 15 年ごろまでの長坂ではほとんどの家に屋号がついていたことがわかる。鹿島地区に５軒・荻野地区に２軒あった屋号のない家は「○○さん」と名字で呼ばれていた。いずれも別荘や会社の従業員、小学校の教員など村の外から移り住んだ人たちであった。

一般的に、屋号は先祖の名前に由来するものが多いとされているが、長坂の場合はそうとは限らないことが表からわかる。なお、先祖の名前に由来する屋号の家は、呼び捨てではなく「様」や「殿」を付けて呼ばれることが多かった。古くは「○○エム・○○ゼム」は「○○エンド（ン)・○○ゼンド（ン)」などとも呼ばれていた。

分家については、多くが本家と同じ里内に屋敷を構えるが、中には里外の所有地に新設する場合もある。その場合にも、分家は本家と同じ里の構成員とみなされ。本家と同じ氏神様を祀るのが普通であった。また、分家は大通り沿いに屋敷を構え「みせ」を始めるなど、兼業農家となることも多かった。本家の屋号に因んだ「○○みせ」という屋号からも分家であることがわかる。

４．横須賀市長坂・荻野地区に市営水道が敷設されるまで

（１）水道のない時代、横須賀市長坂・荻野地区の人々はどのようにして水を得ていたのか？

平成 21 年２月、髙橋豊家は横須賀市内で井戸の調査をしているグループの依頼を受け、水道のない時代の「長坂の共同井戸」について自らの体験を語った。以下の◎の項目は、その際に豊家の用意したメモを原田保子が一部加筆修正したものである。

◎市営水道敷設以前の長坂の共同井戸　　2009.02.17　高橋豊家

	井戸の名称	所在地	現状	備考
1	松山の井戸	荻野	なし	水量の多い井戸として知られていたが、宅造で埋めた。
2	カクゼム（角左衛門）の井戸	荻野	なし	県営住宅建設で埋めた。
3	セキノヤトの井戸	荻野	あり	今も水が出ている。
4		谷戸	あり	戦後掘削　現在も使用している。
5	ニイヤの井戸	石谷戸	なし	開発で埋めた。
6	お宮の井戸	祖母神社付近	不明	
7	落ち葉の井戸	長坂４丁目	あり	
8	石谷戸の井戸	長坂５丁目古道脇	あり	昔の名主の屋敷跡と伝わり、墓と井戸が残っている。
9	イズモの井戸	長坂３丁目	なし	分譲住宅地造成で埋めた。
１０	ワキの井戸	くすのき台北東に隣接	不明	
１１	善性寺の井戸	射撃場北西奥に隣接	あり	今も水が出ている様子。

◎井戸の管理と「井戸仲間」活動　～ ニイヤの井戸の場合 ～

長坂・荻野地区に市営水道が敷設されたのは、昭和35年頃のことです。往年は各個の家に井戸がありましたが、中には飲用不適の井戸もあり又、質量共に特に良い井戸もありました。そこで、飲用に適した水の出ない家では、良い井戸水の出る近所の家にお願いし、井戸仲間に入れて頂きました。上の表に記した11の共同井戸は井戸仲間が使用していた代表的な井戸です。

その中でも「ニイヤの井戸」の近辺は、重粘土の地質や地形の関係からか良質の井戸は少なく、近辺に住む約 10 軒の家が井戸水を使わせて頂いていました。古人の話によると使用軒数は、時により増減があったとのことで、荻野長坂地域では一番使用軒数の多い井戸であったようです。我が家もここの井戸仲間でした。毎日、井戸水を汲み、桶に入れて天秤棒で担いで家まで運び、飲用水として使用させて頂いておりました。井戸は所有者のＦさんにより、掃除が行き届き、いつもすがすがしい感じがしていました。また、当時ほとんどの共同井戸は「つるべ」・「ひしゃく」で水を汲み上げていましたが、ニイヤの井戸には手押しポンプが設置されていて、衛生的でもありました。

毎年８月７日には井戸仲間たちが集まり、「井戸掃除・井戸替え」を行いました。この日には、井戸水のほとんどを汲み上げ、土等の沈殿物を取り除き丁寧に清掃します。水量の多い井戸でしたので、次の日より10軒で遠慮なく水を使用することができました。井戸替えの日には、清掃終了後に、井戸所有者のＦさんのご厚意でお蕎麦等をいただきながら、親睦会が開かれまし

た。時には酒肴・ビール等もいただいたこともありました。仲間たちにとって特に楽しい日でした。

井戸仲間は、水を必要とする近所の家々の集まりで、里を超えた組織の場合もありました。ニイヤの井戸の場合は、石谷戸・里・堀越の人たちが仲間でした。なお、井戸仲間は、仲間の家族に不幸がありますと、老若男女を問わず、井戸仲間としてお参り・お見送りに参加しました。

長坂・荻野地区に市営水道が普及して40年を超えた現在、往年の代表的な共同井戸も開発工事等により、原形すらあるところは少なくなりました。

◎井戸水利用の簡易水道

荻野川上流の親水広場の近所の「セキノ谷戸」の井戸は現存しています。戦後、荻野地域でこの井戸水を利用してパイプを使用し簡易水道として何軒かで水道水風に使われていました。

谷戸地域でもこのような施設をつくり、現在でも実在するとのことです。

◎飲用水以外の水利用

①各家々では飲用には不適切であっても、井戸が設けられています。これは、風呂・洗濯・掃除等の雑用水井戸です。

②水溜(みずため)と言って小さい堰風の囲いをつくり、農業用特に畑の冠水に使用しています。

③昔は雨水が主で、水田を耕作。場所により川の水も利用していましたが、次第に川を止めて堰をつくるようになり、芝堰・カマダ堰・イヤガ堰・大堰等として活用されました。

昭和初期より溜池（沢山池・虫山池・堀越池等）が開発され、農業用水として活用されました。

（２）横須賀市長坂堀越地区の市営水道敷設　　―髙橋豊家の話より―

長坂の堀越地区は、地形や地質の関係から水に恵まれない土地が多く、どの家にも井戸はあるもののほとんどが飲用には適さず、水量は降雨量に左右されるような井戸であった。そのため、毎年毎年夏の水不足に悩まされ続けてきた。昭和30年代の半ばには洗濯用の水に困り、やむなく射撃場奥の善性寺の井戸の水を使わせてもらうこともあった。善性寺は射撃場建設のために立退きとなっていたが井戸は残り、水量が豊富で足場も良かったのだが、当時はまだ射撃場は米軍が使用していたので、場所柄、安全なところではなかった。

近隣地域に市営水道が普及するようになると、堀越地区の人たちは機会あるごとに市に水道の敷設を強く要望し続けてきたが長い間望みはかなわなかった。昭和36年、待ちきれなくなった住民たちは、遂に自費での水道敷設を思い立って「水道組合」を結成し、市営水道の敷設を実現させた。市営水道とは言え自分たちで引いた水道管に市の水を分けていただき、水の使用料を市に支払うといった形式のものであった。

水道が引けて、一番の喜びは毎朝の水汲みの必要がなくなったことだが、風呂にも洗濯にも水涸れの心配をしなくて良いようになったことも嬉しいことだった。水道が引けた翌日、農協の担当者が付き添って業者が我が家に洗濯機を運んできた。デモンストレーションだからということで、家族や近所の人たちの見守る中、水道水を注水し洗濯機が動き出した。初めは買うつもりはなかったが、便利さを目の当たりにしたことと支払いは後日農協経由でよいということもあって、洗濯の終わるまでには購入を決めていた。水道敷設により、水汲みと同時に洗濯からも解放されたことになった。

「水道組合」の敷設した水道が横須賀市に移管されたのは、昭和42年のことであった。それまでの間に、この地区で新しく水道を引く場合には、加入金を支払って「水道組合」に加入することが必要であった。当初8名であった組合員は6年間で17名にまで増えていたが、「水道組合」の水道が市に移管されることになり、組合は解散した。これで漸く「本物の市営水道」となりホッとした。

―髙橋豊家の日記より（その1）―

年	月	日	内容
昭和36	9	25	午前、K氏(※水道敷設発起人、後に水道組合長に就任)と、S市議訪問、同市議同道にて市水道部へ。 豊家水道会計受諾、K氏より1,000円入金。
36	9	26	正午ごろ、水道部職員来る、水道本管の計算。
36	9	28	午後、水道寄合　於：長坂集会所　（※「水道組合」結成）
36	10	1	水道引き込み線、調べに来る。
36	10	2	午前、農協へK氏と行き10万円借用。借主：K氏、保証人：髙橋豊家 水道施工のA工業所へ内金として支払う。
36	10	2	午後、自家にて水道寄合。誓約書等へ調印
36	10	8	水道本管完成
36	10	9	午前、K氏と農協へ、水道導入資金借用。 先日同様にて、書換、金10万円を改め、37万円とす。年利8分５５
36	10	16	午後、水道引込線工事
36	10	17	集会所にて水道寄合。本管代支払い
36	10	18	朝、H氏来て、水道仲間入り調印と1,000円持参。
36	10	23	水道愈々完成、流水開始。
36	10	24	午前、K氏とS市議宅訪問（同氏不在）、水道完成のお礼呈上。（清酒1級酒715円　玉子500円）

36	10	28	午後、水道寄合　於：集会所
36	10	28	夜、水道清算の日 会計報告：本管工事金。　各人引込請求書配布。 Ｉ建設より1000円(酒その他)、Ａ工業所より酒２升頂く。
36	11	10	水道、Ａ工業所集金日　　我が家引込管分￥17,000 支払い
36	11	11	水道完成祝いの日、市支所長、農協、Ａ工業所来る。
36	12	6	夜、水道の件でＫ氏来る、Ｙ氏の加入の件。
41	3	29	水道役員改選、新組合長Ｓ氏、会計Ｄ氏
41	6	6	Ｎ氏水道加入。会計より、配分金3750円届く。14／5万円
41	12	3	Ｉ氏水道加入金持参　16軒・1件当たり3,125円
42	6	12	夜８時、水道組合寄合　　於：Ｄ氏宅
42	10	27	Ｍ氏(※町内会長)より有線電話、「市、水道工事開始とのこと。Ｓ氏、Ｄ氏に伝言頼む。」と。
42	11	28	夜、Ｍ氏宅にて水道会議　　(※水道本管、市に移管の件)
42	12	4	午後２時、於：佐島Ｋ園　水道組合解散宴会
42	12	13	市、水道修理来る。無料

以上は、長坂堀越地区の市営水道敷設に関わって髙橋豊家から聞いた内容と、豊家の日記より関連する事項を抜粋したものである。

我が家に水道が引けた当時私（豊家長女・原田保子）は中学生で、洗濯機が届いた日のことは鮮明に覚えている。しかし、水道組合の結成に関しては、父の話を聞くまでは詳しくは知らなかった。昭和の時代のこととはいえ、市営水道敷設のために、「水道組合」が結成され私費で本管が敷設されたとは、信じがたい話であった。父は日記で確認しながら話してくれたが、水道組合の結成から水道敷設、その水道が市に移管されるまでの経過が日記に逐一記されていたのは驚きであった。

この度、本稿の執筆にあたり、日記の一部を引用した。公表は控えた方が良い内容が含まれていると思いつつも固有名詞をイニシャルに変えただけで、経過は省かずに記すことにした。水に恵まれなかった農村地域の人たちが変わりゆく時代を生き抜くための苦肉の策であったことを物語る「歴史」ととらえたからである。なお、表中の（※　)部分は、父から聞いていたことをもとに補足した内容である。

水道の敷設は、日々の暮らしの質の向上のみならず、稲作にも大いに貢献することになった。昭和42年5月～6月の父の日記には干ばつのため堀越堰の水が少なく、田植え用にしか送水できないので地域全体で、水道水を苗間づくりに利用したことが記されている。我が家の場合、

苗代への水道水の送水は5日間にわたって行われた。苗代は2か所にあったため、自家から遠い方のT苗代には、同じ水道組合の2軒の家から送水させていただいている。

―髙橋豊家の日記より（その2）―

年	月	日	内容
42	5	20	堰役員緊急招集。堰水少なく、田植え準備は水道水でと決定。
42	5	22	Eさん宅より水道水をもらい、T苗代へ水引。下のBさんの田へも送水。
42	5	24	T苗代へ水道水送水（Mさん鶏舎より）。
42	5	27	午前、Eさん宅より送水。
42	6	1	下の苗代へ、自宅水道水送水。
42	6	2	午前、EさんよりT苗代へ送水。午後、下の苗代へ自家水道水送水。
42	6	14	朝、堰水送水（田植え用）開始。
42	6	15	堰水送水2日目。
42	6	16	田植え始め。

その年の12月31日の日記には、次のような一節が記されている。

昭和42年を送る。（中略）　大干ばつによる田植えの悪戦苦闘、但し収量はその後の恵雨によりまずまず。特に政府売り渡し米10俵のうち、2俵の二等米が出たことは我が家の史上初めてである。（以下略）

おわりに

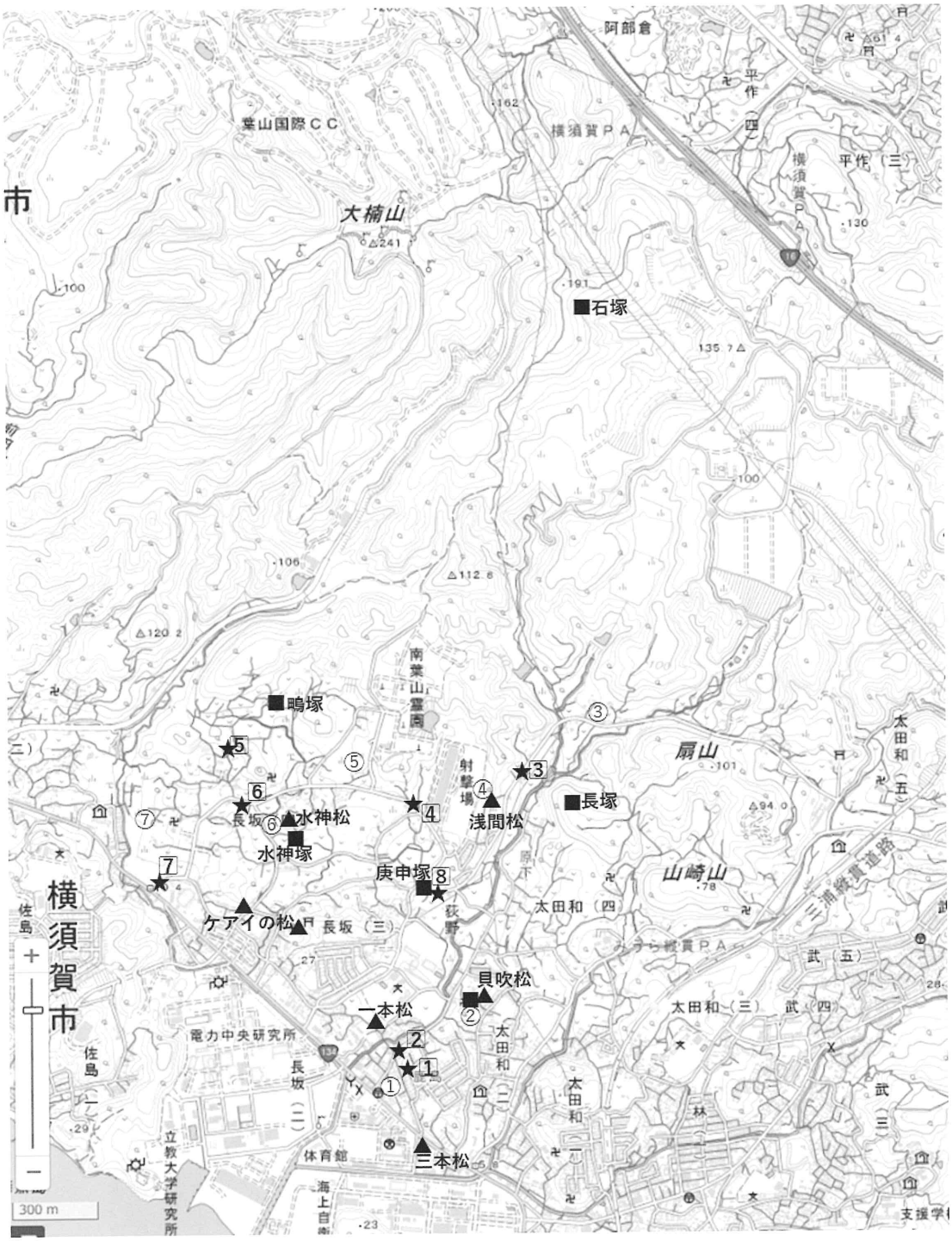
髙橋豊家（大正14年～令和3年）は終戦後間もないころから70年余りにわたってほぼ毎日、日記を書き続けてきた。自己の振り返りのために記したとのことだが、父親が昭和21年4月に急逝したため、21歳の誕生日を前にして祖母・母・妹と本人で構成される一家の当主となったこともあって、日記には、冠婚葬祭・年中行事を始めとする様々なしきたりに関する覚え書きなども折に触れて記録されている。記録を後日読み返して活用することも少なくなかったようで、いつのころからか、地域でも豊家の日記の存在が知られるようになっていた。加えて、豊家は長坂を離れて暮らしたことは出征していた昭和20年8月の1か月足らずだけであったこと、長命だった祖母が語ってくれた長坂の昔の話や、子どものころの体験などをよく記憶していることも知られていた。そのため、75歳を過ぎた21世紀の始まり（平成13年）頃から、有志グループの聞き取りや地域散策ガイド・小中学校の総合学習支援などの依頼を受けるようになった。そのころから、長女の原田保子も折に触れてテーマを決めて父からの聞き取りを始めた。

このたびの報告は、平成 14、15 年頃の聞き取り内容と関連する日記やメモを中心としたものである。この報告を通じて、長坂の変遷に関わる豊家の記憶と記録が散逸することなく遺ることを期待したい。

地図①　長坂七里の地図

①～⑦里の神社　★①～⑦：各里の庚申塔　★⑧：堀越にある日蓮宗の庚申塔　▲：七本松　■：七塚

地図中の 1～7 の番号は表に示した各里の番号に同じ。表にある通り、現存するものは少ない



国土地理院『地理院地図』https://maps.gsi.go.jp/　をもとに加筆

地図②　明治 15 年測図（迅速測図）

地図③　明治 28 年測図（大日本帝国陸地測量部）

地図④　市営水道敷設以前の長坂の共同井戸　※地図上の番号は、表の井戸の番号に同じ。

国土地理院『地理院地図』https://maps.gsi.go.jp/　をもとに加筆